

臨地実習に相応しい看護学生の身だしなみに関する文献検討

市川裕美子

要旨

専門職である看護師の服装、身だしなみは、汚染から身を守るという機能的な面だけではなく、看護師として相応しい外見であることで、患者との信頼関係をスムーズに構築することにもつながっていると考えられる。昨今、看護師の服装や身だしなみに関するとらえ方や考え方は、時代とともに変化し多様化している。今回、看護学生の身だしなみについての現状を文献から明らかにした結果、ユニフォームに対して患者が抱いていた印象は、清潔度や着こなしなどに関しておおむね良好であったが、臭い・シミや汚れの付いたユニフォームの着用は容認できないであった。接遇・マナーでは患者に対する挨拶や態度を重要視していたが、学生と実習指導者とは乖離があった。身だしなみ・化粧では、髪型や髪色、化粧、衣類で個人の自由を選択した割合が有意に高かった。実習中は普段より化粧を薄くし、実習に適した化粧で真面目な印象を与えたいなどと考えていた。今後は、さらに教員と実習指導者が協働して、信頼や好感の持てる看護学生の身だしなみについて指導・支援する必要性が示唆された。

キーワード：臨地実習 看護学生 身だしなみ 化粧 ユニフォーム

I. はじめに

日本看護協会の「看護師の倫理綱領（2021）」の中で、「看護職は、常に、品位を保ち、看護職に対する社会人の人々の信頼を高めるように努める」と明示している。看護に対する信頼は、専門的な知識や技術のみならず、誠実さ、品性、清潔さ、謙虚さなどに支えられた行動が大きく、社会からの信頼が不可欠であり、専門領域以外の教養を深め社会常識などをも十分に培う必要があるとしている。専門職である看護師の服装、身だしなみに関する問題は、汚染から身を守るという機能的な面だけではなく、看護師として相応しい外見であることで、患者との信頼関係をスムーズに構築することにもつながっていると考えられる。

昨今、看護師の服装や身だしなみに関するとらえ方や考え方は、時代とともに変化し、現在は白衣、スクラブなど形状や色、スタイルが多様化している。医療機関においては、身だしなみに対する規定はあるが、常識の範囲内で個人に任されている部分も少なくない。

看護学生は、看護師資格を取得するために特定の教育機関に入学し、専門職である看護師としての一步を踏み出し、臨床実習で患者や家族と出会い、接し、学びを得ていく。当大学看護学科では、臨地実習における基本的な身だしなみとして、髪型や髪色、アクセサリの禁止や服装などについて指導を行っている。しかし、多様な価値観を持ち入学している学生は、髪色、頭髪のまとめ方など「自分ではしているつもり」で行っているため繰

り返し指導が必要となる場合もある。身だしなみに関しては、許容度に差があることが報告されているが、看護学生の身だしなみについて現状を文献から明らかにし、さらに信頼や好感の持てる看護学生の身だしなみと今後の指導への示唆を得たいと考えた。

Ⅱ. 研究目的

臨地実習での看護学生の身だしなみについての現状を明らかにし、信頼や好感の持てる看護学生の身だしなみについて考察する。

Ⅲ. 用語の定義

1. 身だしなみ：本研究では、身だしなみとは他人に不快な感じを与えないように言動や服装を整えること。頭髪や化粧、爪、ユニフォームなどを含む。
2. ユニフォーム：看護学生が学内での演習や施設（病棟）で着用する服装とする。

Ⅳ. 研究方法

1. 研究対象文献

医中誌 Web、Google Scholar を用いて、「臨地実習」「看護学生」「身だしなみ」「化粧」「ユニフォーム」のキーワードを1つまたは複数組み合わせ検索した文献の中から、研究目的にあった10件の文献を対象とした。研究対象文献は表3-1～表3-3に示す。

2. 倫理的配慮

本研究は文献研究であり、倫理的配慮には該当しない。

Ⅴ. 結果

1. 患者の視点からみた看護師の身だしなみ

- ①ユニフォームに対して患者が抱いていた印象は、清潔度や着こなしなどに関して概ね良好であった。
- ②ユニフォームの色については「白以外でもよい」との回答が過半数を占めた。スカート丈や化粧、髪型、髪の色などの項目で、従来に比較すると看護師の自由を許容する割合が漸増していた。
- ③香水や口臭、薬品、汗などの臭気が付いたユニフォームの着用など臭いに関する項目や、アクセサリー・マニキュアに関する見解は好意的ではなく、経年的な変化はみられなかった。また、シミや汚れの付いたユニフォームの着用も容認できないとする意見が過半数を占めた。

2. 接遇・マナー

- ①学生の実習前後に接遇調査を行った結果では、清潔9項目のうち「髪をすっきりまとめている。肩まで届く長さや前髪で目が隠れていませんか」の1項目、実習態度に関する29項目のうち、名札や挨拶、コミュニケーションなど21項目に関する認識や態度が実習後

に望ましく変化しているとする有意差を認めた。

②臨床実習指導者からみた学生の好感がもてる行動は、患者に対する挨拶や態度を重要視しているが、学生の知識や身だしなみ、デイリーノートの記載量は重要視していない。

③初回臨地実習に臨む1年次看護学生が、自分たちで作成したチェックリストを活用し、接遇やマナーをどのように意識し捉えたかについて分析した結果では、【服装や髪型に清潔感を意識し学生らしく整えた身だしなみ】、【言葉の使い方を考え笑顔や挨拶の必要性を意識した行動】、【時間やマナーを守りゆとりがもてる行動の大切さ】、【コミュニケーションを積極的に行う気持ちを持ち続け築けた患者との関係性】、【看護学生としての責任を持ち学びを吸収していく姿勢】、【グループでの協力や話し合いの大切さ】の6つのカテゴリー47コードを良くできたと感じていた。次回臨地実習へ向けた自己課題としては、【学生としての基本的なマナーの再認識】、【自己の体調管理の大切さ】、【患者の視点に立ち個別性をとらえたケアの必要性】、【実習で学ぶ学生として必要と感じた積極的な姿勢】、【グループで協力することの必要性】、【スタッフの一員であるという自覚の芽生え】の6つのカテゴリー48コードであった。

④初回臨地実習における看護学生の接遇・マナーについて実習指導者の評価では、調査10項目の内「できた」と「半数以上ができた」の合計が50%以上あったのは、「看護学生として相応しい身だしなみが整えられていた」、「挨拶はできていた」、「受け持ち患者とのコミュニケーションは円滑に行えていた」、「受け持ち患者を尊重した態度で接することができていた」、「医療チームの一員として、協調性のある行動がとれていた」の5項目であった。「言葉遣い」、「報告」、「グループメンバー間の連携」、「指導されたことを受け入れる姿勢や態度」、「カンファレンスへ積極的に参加」の5項目については50%以下であった。

3. 身だしなみ・化粧

①看護大学生と看護師への調査では、看護大学生は髪型や髪色、化粧、衣類で「個人の自由」を選択した割合が有意に高く、一般的に望ましいとされる看護師の「身だしなみ」とは乖離があった。患者との円滑な信頼関係を形成するための指導内容は、髪色は黒髪か黒髪に近い弱い茶色、カラーコンタクトはつけない。信頼・責任の因子得点が高い「白色」を身につけ、感染リスクの高いアクセサリは付けない。爪は短く切るであった。また、看護師の身だしなみに対する意識の年代群での比較では、20歳以上40歳未満の看護師は、身だしなみに自由さを求めている。

②全国の看護系大学の身だしなみに関する指導では、身だしなみのチェックリストの使用は、全体の42.5%であり、教員の身だしなみの指導で重要視した項目は、外見的にも清潔感がある、安全への配慮がされている、機能的であるの順であった。指導ポイント項目の「機能的である」とチェックリスト項目の「頭髮の髪色、頬に髪が触れない（サイド）、襟に髪がつく」の3項目に有意差がみられた（ $p<0.05$ ）。髪色の指導では地毛が5割弱、茶髪を示す美容院ヘアカラー番号での指導が4割強であり、カラーリングの美容院ヘアカラーの番号は5～7以下であった。他には自然な色、華美にならない色、実習施設のヘアカラー番号で指導しているであった。

③看護学生の化粧の認識と現状では、普段は9割以上、実習では約8割の学生が化粧をしていた。化粧にかかる時間は普段13分、実習では約8分と普段の化粧に比べて短く、化粧品は5割以上の学生がファンデーション、アイブロウ、チーク、口紅・リップクリー

ムを使用していた。実習は普段より化粧を薄くし、【実習に適した化粧】で【真面目な印象を与えたい】などと考えていた。化粧の印象ではファンデーション、アイブロウ、チーク、口紅・リップクリームを使用する化粧モデル B の評価が最も高く、優しさ、明るさ、信頼感の 3 項目において、他の化粧より評価が有意に高かった ($p<0.01$)。

④看護学生の臨床実習での化粧方法の特徴では、学年別および職業経験別での日常生活と実習期間での変化はなかったが、年齢別では 25 歳以上の学生で実習期間に化粧をする人が少なかったほか、実習期間はベースメイク、チークメイク、アイメイクがそれぞれ減り、アイメイクに使用する色も目立つ色を避けてナチュラルな化粧を意識していた。実習中は、身だしなみや衛生面、香り、化粧の色に配慮する説明を受けていた。実習経験の浅い 3 年次生は使用する化粧アイテム数が少なく、睡眠や学習時間の確保に影響されていることが考えられた。

VI. 考察

1. 患者の視点からみた看護師の身だしなみ

ユニフォームに対して患者が抱いている印象は、清潔感など概ね良好であると考えられた。ユニフォームの色に関して、白衣の白からイメージすることは、清潔感（真っ白な白衣からは明るく清潔な印象を受け、衛生面への配慮も伝わる）や信頼感（白は信頼感を与える色）、さらには威厳などだが、「白以外でもよい」が過半数を占めていたことは、患者側がこれまでの白色のイメージに象徴された外観の清潔な印象や清楚な美しさよりも、看護を受ける上での機能性を重視するようになってきているためと考えられる。このように、ユニフォームの色や形状、化粧、髪型、髪の色などは、看護師の自由を許容する割合が高くなってきていることが明らかになった。しかし、患者それぞれ自由の許容範囲が違ふことに留意する必要がある、専門職としての身だしなみと個人のおしゃれは同義でないことを認識して、清潔感とのバランスをとることが重要と考える。

臭いに関する項目やアクセサリ・マニキュアに関しては好意的ではなかった。また、シミや汚れの付いたユニフォームの着用も容認できないとする意見が過半数を占めたことは、患者は清潔な白衣や清潔感を最も大切に思っている表れと考えられる。私たちは患者がユニフォームのシミや汚れ、臭いなどに注目していることを認識して、着用時は努めて注意を払う必要がある、看護学生に指導をしていく必要があると考える。

2. 接遇・マナー

当大学看護学科では、学生に対して 1 年次から看護に必要な基本技術として接遇や実習に必要なマナーについて文書や口頭で指導し、演習や臨地実習においてもその都度確認・教授している。今回の実習前後の接遇調査結果からは、臨地実習では繰り返し経験を重ねることで、患者と関わる看護学生としてのあるべき姿を身につけていっていると考えられる。また、清潔の 9 項目中 1 項目で有意差があったことは、学生の清潔に関する意識の高さと共に人間関係において外見から整えることの必要性を自覚していると考えられる。今後も人間関係を豊かにできる人材となるよう接遇における教育を実践していくことと、学生が臨地実習で実践できるよう指導をしていくことが重要と考える。

実習指導者の評価では、学生の接遇・マナーについて身だしなみや挨拶、患者とのコミ

コミュニケーション、患者を尊重した態度で接していたなどは、できた、半数以上できたであった。一方、私語が多い、言葉遣いが悪い、指導されたことを受け入れる姿勢や態度が悪いなど、学生評価と実習指導者の評価には乖離があり、医療現場で求める水準には到達していないことが分かった。評価が低かった項目については教育指導の創造・工夫し、接遇やマナーについての行動力を身につけていけるよう関わっていくことが必要と考えられる。

3. 身だしなみ・化粧

今回の結果からは、看護大学生は髪型や髪色、化粧、衣類で個人の自由を選択した割合が有意に高く、看護師の身だしなみに対する意識の年代群での比較でも、20歳以上40歳未満の看護師は身だしなみに自由さを求めている。しかし、一般的に望ましいとされる看護師の身だしなみとは乖離があった。自分ではしているつもりでも相手がどう感じるかが重要であり、その都度指導していくことが必要と考えられる。

身だしなみについてはチェックリストを使用している大学が42.5%であった。チェックリストを用いることは、学生と教員、指導者と共通理解ができ、相互に客観的に評価ができること、自己の振り返りにもつながっていくと考えるため、今後導入の検討をしていきたいと考える。身だしなみの指導ポイントは、外見的にも清潔感がある、安全への配慮がされている、機能的であった。看護師はケアの受け手である患者に不快感を与えず、信頼感と安心感を与えることが重要である。手指や髪型、服装などを清潔にすることは当然すべきことであり、医療者としての責任であると考え。また、特に外見的に重要視している髪色、髪型については、顔周りに髪がかからない、コンパクトにまとめる、ネットを使用するなどである。髪色ではカラーリングが一般的になっていることを考慮して指導していくことが必要で、自然な色、華美にならない色とするだけでなく、美容院ヘアカールスケールで示すことで客観的に共有できると考える。看護師や看護学生と一般市民からみた茶髪許容度は、評価する側の年齢が高くなるにつれて茶髪に否定的であるという報告もされていることを踏まえて指導を行っていくことが必要と考える。

看護学生の化粧については、実習中は普段より化粧を薄くし、実習に適した化粧で真面目な印象を与えたいなどと考えていた。ナチュラルな色合いで、アイメイクは目立たせない方法を実施している。また学年進行により、睡眠や学習時間の確保に影響されていることが考えられるが、実習が進むにつれて慣れなどから化粧時間は確保されていると予想される。

4. 本研究の限界と今後の課題

今回の結果から、患者は看護師に職業人としての清潔感のある身だしなみを求めている。接遇・マナーを実践することは、患者に安心感を与え、患者との信頼関係が結ばれることにつながる。よって、看護学生の清潔に対する意識の高さと共に人間関係において外見から整えることの意味づけができていること、実習を重ねることで、看護の初学者としての専門性や責務を意識できるようになっていることが示唆された。職業社会化のプロセスについては看護教育の場面のみでは十分でないと考えられるため、身だしなみに対する最新の知見を明らかにするとともに、価値観の多様化を認めつつも専門職として望ましい清潔感や身だしなみの在り方についても検討し、教員と実習指導者が協働して学生を支援する必要があると考えられる。

VII. 結論

1. ユニフォームに対して患者が抱いていた印象は、清潔度や着こなしなどに関して概ね良好であった。ユニフォームの色や化粧、髪型、髪の色などの項目で、従来に比較すると看護師の自由を許容する割合が漸増していたが、臭気やアクセサリーに関する見解は好意的ではなく、シミや汚れの付いたユニフォームの着用も容認できないとする意見が過半数を占めた。
2. 実習指導者は、学生の接遇・マナーについて身だしなみや挨拶、患者とのコミュニケーション、患者を尊重した態度で接していたなどは半数以上できていたと評価したが、私語が多い、言葉遣いが悪い、指導されたことを受け入れる姿勢や態度などが悪いなどの評価もあり、学生評価と実習指導者の評価には乖離があった。
3. 看護大学生は髪型や髪色、化粧、衣類で個人の自由を選択しているが、実習では適した髪型・髪色、普段より化粧を薄くするなどとし、真面目な印象を与えたいなどと考えていた。
4. 患者との円滑な信頼関係を形成するため、専門職として望ましい清潔感や身だしなみの在り方について検討し、教員と実習指導者が協働して学生を支援する必要があることが示唆された。

VIII. 研究対象文献

1. 萩あや子、玉谷奈都美、岡山加奈（2014）：大学生が患者の視点で捉えた看護師の化粧に対する評価、岡山県立大学保健福祉学部紀要、21-1、131-141.
2. 長谷部佳子、浪久知子（2007）：看護師の身だしなみに対する患者の見解、日本赤十字北海道看護大学紀要、7、1-9.
3. 長守加代子、原元子、宮城和美他（2013）：A 短期大学成人間学実習（慢性期）前後における看護学生の接遇の変化、共創福祉、8-2、27-32.
4. 岩瀬弘明、村田伸、廣瀬智理他（2013）：臨床実習学生の「好感が持てる行動」に関わる意識調査－臨床実習指導者へのアンケート調査から－、理学療法化学、28-6、709-713.
5. 三味祥子、実藤基子、吉田和美（2012）：1年次看護学生の接遇・マナー教育に関する研究（第1部）－学生自ら作成した接遇・マナーチェックシートを活用しての学生の学び－、日本赤十字広島看護大学紀要、12、37-44.
6. 実藤基子、吉田和美、三味祥子（2012）：1年次看護学生の接遇・マナー教育に関する研究（第3部）－実習指導者からの評価と課題－、日本赤十字広島看護大学紀要、12、53-61.
7. 吉田香、美濃陽介（2023）：看護師、臨床実習中の看護学生の身だしなみに対する意識調査、日本看護学教育学会誌、33-1、39-48.
8. 渡邊光代、鈴木浩美（2023）：看護学生の身だしなみ・ユニフォームの着用時における指導に関する調査、目白大学健康科学研究、16、67-77.
9. 萩あや子、岡山加奈、岡野綾香（2019）：看護学生の化粧の現状と認識、姫路大学看護学部紀要、11、1-7.
10. 鈴木玲子、矢部さおり（2014）：臨床実習における看護学生の化粧方法の実態に関す

る研究、埼玉県立大学保健医療福祉科学、4、6-11.

IX. 引用参考文献

1. 日本看護協会：看護師の倫理綱領（2021）
https://www.nurse.or.jp/nursing/assets/statistics_publication/publication/rinri/code_of_ethics.pdf（2024.1.31 閲覧）
2. 西岡敦子（2013）：男性の化粧は受け入れられるのかー男性の化粧行動からー、繊維製品消費科学、54-4、54-60.
3. 萩野待子（2016）：2015 年度兵庫医療大学全学 FD／SD「主体性を育むには」ー第 1 学年次看護学生の態度教育におけるー考察ー、兵庫医療大学紀要、4-2、49-53.
4. 長谷川美貴子（2012）：看護学生における職業社会化と職業意識の関係性、淑徳短期大学研究紀要、51、167-184.
5. 三尾亜喜代、曾田陽子、小松万貴子（2016）：臨地実習で看護学生が注意を向ける看護師の行動と見習いたくないと認識する行動、日本看護学教育学会誌、26-1、43-54.
6. 日本ヘアカラー協会、JHCA のレベルスケール、<https://www.jhca.ne.jp/levelscale/>、（2024.1.11 閲覧）

利益相互

本研究における開示すべき利益相反はない。

執筆者紹介（所属）

市川裕美子 八戸学院大学看護学科 准教授

研究対象文献 表 3-1

分類	①著者 ②テーマ（発行年）	③研究目的 ④研究方法	結果・結論
患者の視点から	①萩あや子他 ②大学生が患者の視点で捉えた看護師の化粧に対する評価（2014）	③大学生が入院患者であると想定し看護師のどのような化粧が、患者に好印象を与えるかを明らかにする。 ④A 大学 3 学科の学生 126 名に質問紙調査を実施した。	濃い・派手な化粧の印象は「話しかけにくい・近づきにくい」「怖い」が多く、薄い・地味な化粧の印象は「話しかけやすい・近づきやすい」「清潔」が多かった。看護師の化粧 A（薄）～ E（濃）の評価では、化粧 B が最も高く、化粧 A、C、D、E の順に低くなった。5 項目の平均評価得点は化粧 A ～ C まだが 3 点以上であった。項目ごとでは、化粧 A は真面目さの評価が高く、化粧 C、D では明るさの評価が高かった。看護師の化粧では、化粧 A のファンデーションと眉ずみに化粧 B のチークと口紅を加え、顔色を健康的で明るい印象にすることで患者に好印象を与え、評価が高まることが示唆された。
	①長谷部佳子他 ②看護師の身だしなみに対する患者の見解（2007）	③看護サービスの受け手である患者が看護師のユニフォームや身だしなみについてどのように考えているか、身だしなみ全般に対する患者の見解を把握し看護教育に反映させる。 ④約 2 か月の調査期間中、関東圏の A 病院外来受診者のうち同意を得られた 130 名の患者を対象とした。ユニフォームの印象 4 項目、看護師に望む服装と身だしなみ 13 項目について調査した。	ユニフォームに対して患者が抱いていた印象は、清潔度や着こなしなどに関しておおむね良好であった。ユニフォームの色については「白以外でもよい」との回答が過半数を占めたほか、スカート丈や化粧、髪型、髪の色などの項目で、従来に比較すると看護師の自由を許容する割合が漸増していた。しかし、香水や口臭、薬品・汗などの臭気が付いたユニフォームの着用など臭いに関する項目や、アクセサリ・マニキュアに関する見解は好意的ではなく、経年的な変化はみられなかった。また、シミや汚れの付いたユニフォームの着用も容認できないとする意見が過半数を占めた。これらの結果から、患者は看護師に職業人としての清潔感のある身だしなみを求めていることが明らかになった。
接遇・マナー	①長守加代子他 ② A 短期大学成人間学実習（慢性期）前後における看護学生の接遇の変化（2013）	③A 短期大学成人看護学実習（慢性期）において学生に対し接遇調査を行い、第一印象を大きく左右する「清潔」と「実習態度」を実習前後に比較し変化の実態を明らかにする。 ④A 短期大学看護学科 3 年生の承諾を得られた 62 名を対象とし、清潔に関する項目 9 項目、実習態度に関する項目 29 項目の自記式質問紙による調査を行った。	「清潔」に関する調査のうち 9 項目中 1 項目で、実習前後の「清潔」に関する行動に有意に変化がみられた（ $p < 0.05$ ）。また実習態度に関する全 29 項目のうち、21 項目に実習前後の実習態度に関する認識や態度が望ましく変化しているとする有意差を認めた。これらの結果から、看護学生の清潔に対する意識の高さと共に人間関係において外見から整えることの意味づけができていくこと、看護の初学者としての専門性や責務を意識できるようになったことが示唆された。
	①岩瀬弘明他 ②臨床実習学生の「好感が持てる行動」に関する意識調査－臨床実習指導者へのアンケート調査から－（2013）	③臨床実習指導者からみた学生の「好感がもてる行動」を明らかにすることを目的とした。 ④第 1 次調査では、臨床実習指導者を対象に自由記述式のアンケート調査を行い、学生に求められている 148 項目の行動を明らかにした。第 2 次調査では、1 次調査で得	臨床実習指導者からみた学生の好感がもてる行動は「患者にはつきりと挨拶ができる」など、患者に対する態度に関する項目が上位を占めていた。一方、下位項目は学生の知識や身だしなみ、デイリーノートに関する項目であった。臨床実習指導者は、患者に対する挨拶や態度を重要視しているが、学生の知識や身だしなみ、デイリーノートの記載量は重要視していないことが示唆された。

研究対象文献 表 3-2

		られた好感がもてる行動の重要度を明らかにした。	
接 遇 ・ マ ナ ー	①三味祥子他 ②1 年次看護学生の接 遇・マナー教育に関する 研究（第 1 部）－学生自 ら作成した接遇・マナー チェックシートを活用 しての学生の学び－ （2012）	③初回臨地実習に臨む 1 年次看護学生が、 自分たちで作成したチェックリストを活用 したことで、学生が接遇やマナーをどのよ うに意識し、捉えたかについて分析し、今後 の接遇教育への示唆を得ることを目的とし た。 ④初回臨地実習を行った A 大学の 1 年次看 護学生、学生が作成した接遇・マナーに関す るチェックリストを活用し、実習終了後に 提出してもらった。	【服装や髪型に清潔感を意識し学生らしく整えた身だしなみ】、 【コミュニケーションを積極的に行う気持ちを持ち続け築けた 患者との関係性】等の 6 つのカテゴリーを初回臨地実習の接遇や マナーで良くてきたと感じ、【学生としての基本的なマナーの再 認識】、【実習で学ぶ学生として大切と感じた積極的な姿勢】等の 6 つのカテゴリーを次回臨地実習へ向けた自己課題としていた。 接遇・マナーを実践することは、患者に安心感を与え、患者と の信頼関係が結ばれることにつながる。よって、これからも学生 が臨地実習で接遇・マナーを実践し、人間関係を豊かにできる人 材となるよう接遇における教育開発を実践していく必要性があ ることが示唆された。
	①実藤基子他 ②1 年次看護学生の接 遇・マナー教育に関する 研究（第 3 部）－実習指 導者からの評価と課題 －（2012）	③初回臨地実習における看護学生の接遇・ マナーを、実習指導者の評価から明らかに し、今後の接遇教育への示唆を得ること である。 ④学生が作成した接遇・マナーに関するチ ェックリストを各病棟の実習指導者へ手渡 し、実習終了後、学生の接遇・マナーを評価 してもらった。	調査 10 項目の内、「できた」と「半数以上ができた」の合計が 50%以上あったのは、「看護学生として相応しい身だしなみが整 えられていた」、「挨拶はできていた」、「受け持ち患者とのコミュ ニケーションは円滑に行えていた」、「受け持ち患者を尊重した態 度で接することができていた」、「医療チームの一員として、協調 性のある行動がとれていた」の 5 項目であった。 「言葉遣い」、「報告」、「グループメンバー間の連携」、「指導され たことを受け入れる姿勢や態度」、「カンファレンスへ積極的に参 加」の 5 項目については 50%以下であった。学生の自己評価や教 員からの評価に比べて実習指導者からの評価が低かったことか ら、今後さらに、教員と実習指導者が協働して学生を支援する必 要性が示唆された。
身 だ し な み ・ 化 粧	①吉田香他 ②看護師、臨床実習中の 看護学生の身だしなみ に対する意識調査 （2023）	③現場で看護を実践している看護師、実習 経験している看護大学生は、看護師の身だ しなみについて患者との信頼関係構築の視点 からどのように捉えているのかについての 認識の相違を明らかにする。 ④A 看護大学の実習経験のある 2・3・4 年 生 241 名と無作為に抽出した 20 病院の看 護師 510 名を対象に自記式質問紙で調査し た。	看護大学生群は、髪型や髪色、化粧、衣類で「個人の自由」を選 択した割合が有意に高く、一般的に望ましいとされる看護師の 「身だしなみ」とは乖離があった。20 歳以上 40 歳未満の看護師 は、身だしなみに自由を求めている。看護基礎教育において患者 との円滑な信頼関係を形成するための指導について示唆された。 内容は、髪色は黒髪か黒髪に近い弱い茶色、カラーコンタクトは つけない。信頼・責任の因子得点が高い「白色」を身につけ、感 染リスクの高いアクセサリは付けない。爪は短く切る。また、 看護大学生には専門職として相応しい「身だしなみ」に対する教 育の必要性がある。
	①渡邊光代他 ②看護学生の身だしな み・ユニフォームの着用 時における指導に関す	③全国の看護系大学で、看護基礎教育でユ ニフォーム着用を含む身だしなみを、どの ような視点で指導をしているのかを明らか にする。	回収率は、30.0%であり、所属大学種別は、私立大学が 68.8%、 公立大学法人が 16.2%、国立大学法人が 15.0%であった。指導 領域は、82.5%が基礎看護学領域であった。身だしなみのチェッ クリストの使用は、全体の 42.5%であり、教員の身だしなみの指

研究対象文献 表 3-3

身 だ し な み ・ 化 粧	る調査（2023）	④日本看護系大学 265 校で学生のユニフォーム着用時の身だしなみの指導をしている看護学領域責任者 265 名を対象に質問紙調査を実施した。	導で重要視した項目は、外見的にも清潔感がある、安全への配慮がされている、機能的であるの順であった。 指導ポイント項目の「機能的である」とチェックリスト項目の「頭髮の髪色、頬に髪が触れない（サイド）、襟に髪がつく」の 3 項目に有意差がみられた（ $p<0.05$ ）。これらは、教員が指導をする上で重要視している項目であることが示唆された。
	①萩あや子他 ②看護学生の化粧の現状と認識（2019）	③看護学生の化粧の現状と認識を明らかにする。 ④看護学生 105 名を対象に、質問紙調査を実施した。	普段は 9 割以上、実習では約 8 割の学生が化粧をしていた。化粧にかかる時間は普段 13 分、実習では約 8 分と普段の化粧に比べて短く、化粧品は 5 割以上の学生がファンデーション、アイブロー、チーク、口紅・リップクリームを使用していた。実習は普段より化粧を薄くし、【実習に適した化粧】で【真面目な印象を与えたい】などと考えていた。化粧の印象では、ファンデーション、アイブロー、チーク、口紅・リップクリームを使用する化粧モデル B の評価が最も高く、優しさ、明るさ、信頼感の 3 項目において、他の化粧より評価が有意に高かった（ $p<.01$ ）。学生は実習の化粧として化粧モデル B を最も好ましいと考えていることが示唆された。
	①鈴木玲子他 ②臨床実習における看護学生の化粧方法の実態に関する研究（2014）	③看護学生の看護実習における化粧の実態を調査することで、臨床実習での化粧方法の特徴を明らかにする。 ④看護系大学に在籍している女子看護学生 264 名を対象として 2012 年 10 月に調査した。	学年別および職業経験別での日常生活と実習期間での変化はなかったが、年齢別では 25 歳以上の学生で実習期間に化粧をする人が少なかったほか、実習期間はベースメイク、チークメイク、アイメイクがそれぞれ減り、アイメイクに使用する色も目立つ色を避けてナチュラルな化粧を意識していた。実習中は、身だしなみや衛生面、香り、化粧の色に配慮する説明を受けていた。実習経験の浅い 3 年次生は使用する化粧アイテム数が少なく、睡眠や学習時間の確保に影響されていることが考えられる。結論としては、臨床実習での看護学生の化粧はナチュラルな色合いで、アイメイクは目立たせない方法を実施している。また学年進行により、実習への慣れから化粧時間が確保できていることが予測される。